

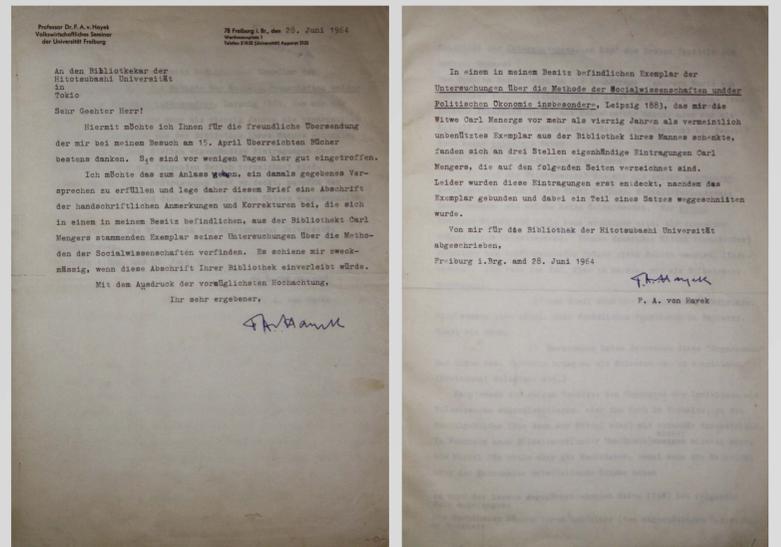
文庫のその後 —研究と保存—

The Library now : its research and conservation

研究対象としてのメンガー文庫

メンガー文庫は遠く海を隔てた日本に渡った後も、国内外の研究者の関心を引き続けた。限界効用学説史の研究者であるエミール・カウダーは、メンガー文庫調査のために1960年9月から61年3月まで7ヶ月に渡って日本に滞在し、この巨大な文庫の詳細を初めて欧米に紹介した。カウダーは、メンガーの思想の背景について研究を進める過程で、文庫に残された本人による無数の書き込みを精査し、『国民経済学原理』にある書き込み内容の全ページ解読など大きな成果を残した。また、オーストリア学派の後継者であり、貨幣理論でのちにノーベル経済学賞を受賞することになるフリードリヒ・ハイエクは、1964年の来日時にメンガー文庫を見学し、帰国後に自身の所蔵資料に残されたメンガーの書き込み内容を知らせる書簡を一橋大学に宛てて送っている。

近年では、2002年の共同研究「メンガー『国民経済学原理』初版特製本における書き込みの復刻とその内容分析」で、カウダーによってなされた解読作業を更新する形で書き込みの内容が新たにまとめられ、内外の研究者に貴重な資料を提供している。また、2004年には、一橋大学において国際シンポジウム「カール・メンガーと自由主義の歴史的諸相」が開催され、メンガーの思想について様々な視角から活発な議論が交わされた。



F.A.ハイエクから一橋大学に宛てた書簡（1964年6月28日）。ハイエク所蔵のメンガー『社会科学方法論』にある書き込みについて知らせる内容。

文庫の利用と保存

メンガー文庫は、それ自体がメンガーの思想の展開のみならず近代経済学の軌跡を示す貴重な知的遺産であり、文庫が一橋大学によって購入された直後から、その保存と利用のあり方について様々な検討がなされてきた。1926年には、当時の若手教員を総動員して文庫目録の第一巻が作成され、1955年には、第一巻で収録されなかった分野と遺漏分を合わせて第二巻が上梓された。その後1994年には資料全点のマイクロフィルム化が行われ、同時に開始された目録の全面改訂と電子化によって、多くの利用者が文庫の内容に触れることが可能となった。



和紙を用いた修復作業。保存修復工房では資料の状態に応じてこの他にも保革、再製本、保存箱の作成など様々な保存作業を行っている。

こうした目録等の整備と併せて、資料自体の保存も重要な課題である。社会科学古典資料センター附設の保存修復工房では、1994～2000年にかけて、メンガー文庫の劣化調査、保存対策を行っている。また、書庫内の保存環境の維持・整備と併せて、文庫の長期的保存に向けた総合的保存活動は現在も継続して行われている。